

## 失った人権を取り戻すために

橋本市立隅田中学校 2年 宇野 音羽

姉と母と私の三人で暮らし始めて、四ヶ月がたちます。私は今、怒りや悲しみとどうにか向き合おうとしている最中です。毎日たくさんの感情が生まれる中で、何度も何度も、心が抱えていた傷を目にします。

父は、とても自己愛が強い人です。自分の思い通りにならないことを、何よりも恐れているのでしょう。父は、私たちが自分の思い通りにならなかったあと、決まって自分勝手に幼稚な行動をとっていました。私は、父の機嫌を損なわないよう、父がしてほしい言動を考える子供になっていたのです。

気づけば私は、「誰であっても、人の機嫌を損ねる行動はしてはいけない。」と無意識に考えるようになっていました。友達と話しているときには、沈黙が生まれないように、話題を探してしまうのです。時折、自分だけが話題を提供しているように感じ、不満が溜まることもありました。ですが、私は感情と向き合う中で、何のためにこんな行動をとっていたのか理解しました。私は、つまらない人だと思われることが怖かったのです。このことに気付いたとき、少し胸がチクリとしました。私は、友達と話すときすら、嫌われたくないという思いがまとわりついていることにショックを受けたのです。これは、過去の傷から生まれた想いではないでしょうか。

私の心の傷は、おおまかに言うと、「思い通りに動けなければ愛されない。」というものです。この傷があるせいで、誰かに嫌われたり、怒られたりするたびに、「自分はだめな人間なのだ。」と感じてしまいます。これは、自分で自分の人権を否定してしまっているのではないのでしょうか。

親は、子供が目にする最初の大人です。その親に植え付けられたトラウマや恐怖は、そう簡単に引きはがすことはできません。だから親は、ありのままの子供を愛する義務があると思います。

周囲のお父さんを見ると、無条件の愛を子供に与えている人も多いです。そういう光景を見ると、私はとても羨ましいと感じてしまいます。「何で私だけ」と、周囲の人に取り残されたような悲しさに呑み込まれてしまいそうなきももあります。

今、普通の家庭に憧れ、父との別居が始まる前以上に、不安やつらさを感じることもあります。だけど私は、今の環境を温かく幸せなものだと認識しています。母と姉がいてくれるおかげです。弱音や将来の不安を話すと、母はいつも、私のことが大好きだと伝えてくれます。その言葉の温かさに、何度も救われました。姉と何気ない話で笑う時間は、つらいことも、悲しいことも忘れさせてくれます。

「第43回全国中学生人権作文コンテスト」和歌山県大会  
最優秀賞（和歌山県人権擁護委員連合会長賞）

家庭の外にも、学校の先生や、児童精神科の先生など、信頼できる素敵な人たちと私は出会っています。

私は今、心の傷を治すための準備をしています。自分の心を治せるのは、自分しかいません。ですが、傷を早く治す方法や、痛みの和らげ方は、周囲の人が教えてくれます。準備が終わると、私は、私の人権を認めてあげなければいけません。きっとそれが、私の傷を塞ぐ唯一の方法です。

子供のうちは、自分が家庭の中でつけられた傷を認識できないことも多いと思います。だけど、その傷は治せないわけではありません。周囲の人の手助けがあれば、きっと治すことは可能です。一度奪われた自分の人権を、自分にもう一度与えることができた人間は、他人の人権を認められる人になるのではないのでしょうか。

これから先も、子供の人権を奪う親はいなくならないと思います。だから、子供には、いざとなったとき、頼れる大人が必要です。私が今、たくさんの大人の方に支えられているように、子供は大人によりかかれないと生きていけない存在です。それは、何年経っても変わりません。子供の打ち明ける勇気と、大人の手を差しのべられる優しさが、当たり前にある社会であってほしいです。

私は、今も、これまでも、たくさんの大人に支えられています。だから私も、子供が人権を取り戻す手助けができる大人になりたいです。